

〔書評〕

栗原藤七郎編

「日本畜産の経済構造」

小林 茂

戦後における畜産は、日本農業の成長部門、その花形として、華々しい登りをみた。しかし、それにもかかわらず、その急速な発展が主に戦後に限られ、且つ現に成長過程にあるために、畜産に関する研究は主としてその技術的側面にのみ集中し、その経済構造の科学的総合的分析研究は、殆んどその例をみないのが現状である。ところが、現象面では発展過展にあるように見える畜産も、その基本的な経済構造においては、重大な矛盾を孕んでいるのであって、その解決なくしては、将来の合理的発展は望み得ないと言えよう。現にその矛盾は、畜産が農業の成長株だと言われながら、その生産に直接従事している農民のそれから得る収益が、その労働報酬を辛じて充たすに過ぎないという、収益性の低さのうえに、如実に示されている。この時に当って、わが国の畜産の経済構造に、科学的メスをあてて、そこに蟠踞する矛盾の絡繰りを解明することは、単に畜産の将来のみならず、わが国の農業全般の発展のためにも必要な条件であると思われる。本書は実にこのような意味において画期的な且つ野心的な労作である。さらにまた本書の意義を大ならしめているものは、それが多くの学者の共同研究の成果であり、かつその共同研究グループのメンバーがいずれも、畜産プロパーという狭い立場に立たず、つねに日本農業全体のなかにおける畜産の関連性を問題にするという、いわばマクロ的な立場を持しながらミクロ的な分析も行なっているという点である。

本書の構成は、大きく総論・第一部・第二部の三部に分けられる。本書の論究の対象は「資本主義の発展以降の畜産の経済構造」であって、したがって、「資本主義経済の発展に伴う水田農業を基礎とする近世地主制の生

成発展ならびにその解体過程における畜産の停滞と展開が、本書を貫く研究課題である」とされている。しかし、分析の主力は、当然ながら、「戦後における畜産の経済構造の分析」にあてられている。もちろん、「戦後の畜産は戦前のそれを継承し、それを発展させ、また変質させつつ展開している」のであるから、戦前の畜産の歴史的展開の追跡が、まずもって果されなければならない。このことが第一部においてなされている。そして第二部は、言うまでもなく、戦後・特に農地改革後における畜産の展開構造の究明にさかれている。

第一部第一章は「民営牧羊経営の成立と崩壊」と題され、小林忠太郎氏が担当されている。ここでは日本畜産の総体のなかで占める比重は徴々たるものではあるが、日本資本主義が移植されて、それが次第に形を変えて今日の段階にまで至る過程で、最も特徴ある消長を示したものが、「めん羊飼育」であるとして、まず第一にその生成発展衰亡の過程を跡づけることによって、日本畜産の歴史的展開過程で山積みされた諸問題を明らかにしている。また牧羊経営の衰退の原因を(1)牧羊経営のための土地確保の困難と(2)羊毛・羊肉・子羊市場の狭隘に帰し、技術的欠陥を第二次的要素とし、民営牧羊の衰亡の原因を飼養技術の劣等さと地主的土地所有のもとでの高地価においている。この点に関しては、明治期における日本の畜産が生産構造を大きく異にする西欧からの直輸入であって、そのための矛盾がその発展をさまたげているという点をもう少し突っこんで分析してほしいという気がしないわけでもない。

第二章は「農民的牛馬飼育の存在形態」と題する菊地昌典氏の研究である。ここでは、本来的農業の生産過程に組み込まれた畜産、すなわち、水稻作を中心とするわが国の零細な農耕に結びついた大家畜飼育が、必然的にいわゆる役畜・糞畜・駄賃馬とならざるを得なかった経済的諸関係が究明され、さらに、それが、後進日本資本主義の発展のための要請としての優秀なる軍馬育成という課題と相克する。その過程のなかにわが国の農民的牛馬飼育の存在形態が浮きぼりにされている。結局は、両者の相克が、

いずれにも、充分な効果を収めさせずに、第二次世界大戦における軍事技術の質的変革にあって、軍馬の必要がなくなり、農耕上の特殊性には馬よりもむしろ適している牛の飼育が馬に代って延びるというところで戦後に受けつがれるまでが、明解に述べられている。

「恐慌前後の畜産と『有畜農業』の奨励政策」と題する第三章の梶井功氏の論文では、乳牛をはじめ、肉豚・食鳥・鶏卵など畜産全般にわたって、それが昭和の恐慌前後でどのような変化を示したかを、きわめて豊富な統計資料によって追求し、この転換期における農業政策としての「有畜農業」の奨励をあげ、それにもかかわらず、実際に恐慌の過程で畜産の受けた恐慌による被害が他の農業（例えば養蚕や米作等々）よりも少なかったという事実に対する農民的対応として、政府によって奨励された「有畜農業」（既肥利用・畜力利用・収益関係が問題となるような畜産）とは内容の異なった「唯単に畜産物の生産及び其の収益を目的として耕種と並行的に家畜家禽を飼養」する有畜農業へと展開した過程が、明細にたどられている。

第四章は第一部の最終編である菊地昌典氏の「農法からみた糞畜・厩肥論」である。ここでは、既述のような発展を遂げた畜産の代表として、耕種農業と結合した大家畜飼育の日本農業における位置と意義を、その農法の特異性という視点から総括的に分析して、第一部のまとめとしている。西欧における二圃式——三圃式——輪栽式という農法の進展のもとにおける牧野利用の役割と意義を分析することによって、比較農法史的に日本農業における「糞畜」「牧野」の特殊性を解明し、わが国で行なわれている農法を、地力維持視点からみて、西欧の二圃式に等置することによって、その後進性を強調する見解を偏破であるとし、また土地利用という観点から、わが国の農法を高度に発達したものであるとする見解をもまた一面的であるとして、「地力維持が土地利用の高度化にしたがい発展しうる可能性をもつ農法」であると規定し、「機械力による役畜性格の消滅は真の商業的肉牛生産、商業的乳牛飼育を可能ならしめる基礎条件である」と、わが

国農法の意義を認め、家畜が労働手段でなくなって労働対象となっても、既肥採取という意義が失われることなく、商業的畜産と畜産の密着による新しい発展が可能であると結論している。

第二部では、本論である農地改革後の畜産の展開の分析に入り、最初の第五章（「食物消費構造の形態変化」——小林忠太郎）では、戦後の畜産発展の基盤は、畜産物に対する需要の延びにあり、その需要の延びは国民の食物消費構造の変化に基づいているという関連から、わが国の食物消費構造の戦前・戦後における変化を諸外国と比較して分析し、特に戦後の食肉消費量の変化（延び）が豊富な統計資料によって種々の角度から解明されている。

このような畜産物に対する需要の増加は、必然的に畜産の発展を招来する。そこで、第六章（「畜産発展の統計的分析」——土屋光豊）では、畜産の生産構造の量的・質的発展が統計資料に基づいて追求され、農民的畜産の経済的性格が解明され、その脆弱性が指摘されて、その発展に限界のあることが示されている。特にその第四節では畜産農家の経営内容にまで立ち入って、農民的畜産が、その飼料基盤の劣弱さから、大規模畜産へと発展することが制約され、そのため畜産自体によって実現される労働報酬は耕種のそれよりも低いという重要な・わが国畜産の基本的矛盾に触れる指摘を行なっている。

このようなわが国の畜産を類型化するということが、第七章（「畜産形態の分類とその分析」）で、菱沼達也氏によってなされている。わが国の産業は、農家の農業経営のなかで耕種と結びついているのが一般であり、畜産が農家の経営のなかで耕種生産と拮抗する関係とその度合を尺度として、畜産を四つの類型に分けている。第一形態は低い耕種生産に代位する粗放な畜産、第二形態は耕種生産確保のための畜産、第三形態は耕種生産の所得との比較において営まれる浮動的な畜産、第四形態は耕種生産以上の所得を追求する集約的畜産である。このうちで、第三形態は、現金収入を追求し、他の耕種と比較して採算性に不利が認められれば、直ぐ止めて

しまうもので、今日最も多い型であるとし、その例として水田酪農の事例が分析されている。しかし、ここで前章における土屋氏の分析で示された農民的畜産経営の二つのタイプ及び都市周辺の專業搾乳業的農家や、第四章で農法視点より分析された菊地氏の商業的畜産としての発展の可能性などと、この四つの類型との関連が明らかでない。

第八章（「畜産の進展と飼料問題」——梶井功）では、畜産の発展の原動力をなす飼料の問題が取り上げられ、粗飼料では戦後山野草の利用が減少した一方で、飼料作物栽培が伸び、濃厚飼料については、その自給度は大きくなったが、使用量増大に伴い購入飼料への依存は絶対的に増加し、それだけ資本との結びつきが大きくなったことが指摘されている。

以上はいわば畜産の生産過程の分析であるが、つぎに第九章（「家畜商と農民」——菊地昌典）では、その流過過程が組上にあげられ、その非近代的組織の中核としての家畜商の経済的機能とその矛盾が実証的資料によって詳細に解明されている。菊地氏は、この家畜流過における非近代性の根本理由を、「生産者が市場において価格を決定する社会経済的条件が作られていないことにある」とし、その一例に家畜市場における取引きの非農民的性格をあげ、これを克服するためには、共同購入・共同出荷という方法より外にないことを指摘しているが、しかし、それも馬喰の勢力の大きい現下では極めて困難であると決論している。しかし、ここでは家畜流過の非近代性を支えている社会経済的条件についての一層の理論的突込みが足りないように思われる。そのために、家畜流過過程において馬喰の手をさえ経なければ、畜産農民からの前期的な収脱がなくなるような印象を与える。これは、つぎの酪農における大資本の農民からの収脱の堪だしさを十分に説明し得ない結果を招くきらいがある。

最後に第十章（「乳業の発達と酪農」——栗原藤七郎）においては、戦後畜産の代表としての酪農と、畜産における産業資本形成の一典型としての乳業資本との関係、すなわち、資本が直接農民を把握してゆく過程が折出され、そこに日本畜産の将来の姿を暗示して結びにしている。

以上で、各章の内容に触れてきたが、全体としてみると、そこには日本畜産の経済構造上の種々の矛盾が、色々の角度から分析されていることがわかる。しかし、本書にも欠陥がないというわけではない。原理的には、畜産の経済構造は、必然的に日本農業の、さらに日本資本主義の経済構造のなかで、位置づけられなければならないものであり、現に本書の総論においても、栗原氏は、日本資本主義経済の発展に即して畜産の経済構造の変化発展が究明されねばならない旨の敘述をしておられる。しかし実際には、本書の全般にわたって、その点の追求が足りないように思われる。まず第一部においては、戦前の畜産の歴史的展開を、後進的日本資本主義の発展過程における特殊性と関連させて述べるということが、部分的にはなされているが、一貫した流れとしては欠けているように思われる、同じことは第二部においても言われる。このことは、日本畜産の経済構造が種々の角度から分析されながら、個々の論文相互の関連が明瞭でないという欠陥ともなって現われている。またそのことは、第二部の最後に急に独占資本が畜産の前に立ち現われるという結果を招いている。

つぎに、このことは上述の問題とも関連することであるが、畜産物の流通過程で、前期的商業資本が介在するという非近代性の構造的分析が足りないように思われる。日本資本主義は後れて出発し急速に成長したため、寄生地主制を伴って、農業を後れた前期的な形態のまま停滞させた。このことは農地改革後の今日においても、農業経営の担い手が家族労作的な零細農家であるという事実のうえに現われている。一方農産物に対する消費市場は主に都市における近代的なマス市場となって現われている。この生産の前期的性格と消費市場の大規模な近代的性格との対立が、その中間に前期的商業資本を介在せしめるという根本理由ではないであろうか。この点の究明が充分でないために、近代的資本が農業を把握した場合（例えば酪農）でも、その収奪関係とは前期的な性格（平均利潤を越えた大きな収奪）がのこされるという根本矛盾の解明が未完成に終わっているのではないだろうか。

しかし、このような欠陥があるとしても、最初に述べたような本書の画期的な意義は少しも失われるものではない。

(栗原藤七郎編「日本畜産の経済構造」1962年 東洋経済新報社刊 380頁 代価1100円)